駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 12 号

平成5年3月25日　発行

明治鍼灸大学附属図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717－2－1181㈹

読書・専門・分類と普遍知

図書館長　中　村　清

読書は知識を拡大し、未知世界を展開して見せてくれる可能性をもっている。

しかし文章を読んで理解するには、それなりの基礎的知識を持っていることが前提になる。例えばその方面の語彙の知識である。それが無かったり、読者の知識の範囲を超える内容や表現の文であれば、読んでいても眠くなるだけである。

専門的な内容であっても、適切な勉強により理解は可能になり、用語も修得できる。それを読んで理解できること、また使って話せることは喜びにもなる。しかしそうした用語や表現がいささか隠語めく場合もある。その道の専門家にしか通じないことば、つまりジャーゴンである。それは他の人間には分けの分からないことばという意味である。専門語は多かれ少なかれそうした一面を持つが、それが一人よがりに過ぎないなら反省の要があろうし、本物なら普遍性にかけることは無いはずである。

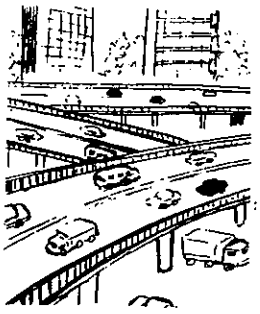
知識や学問は、その第一の媒体である言語を通じて、本質的に普遍的な性格を有するものである。そうでなければ学問ではないし、他人からの評価にもつながらない。コミュニケーションできない知識は自己矛盾である。もともと知識というものも、人から人へと伝えられ、育てられていくものだからである。つまり普遍性をもっているのである。それは人間の精神的活動全般について言える事である。知的理解だけでなく、生活万般にわたって互いに理解し合えることが国際関係の基盤である。

読みたい本が探しやすいように、分類という方法が用いられている。それぞれ共通性を有するものをグループに分けるという発想である。ここにも一種の普遍性の原理が働いている。しかし日本十進分類法のような区分がいったん出来てしまうと、それに当てはまらない本が出版されたり、新しい学問分野が現れた場合、人は不安にもなる。それはまた、その本を探すのに苦労する原因にもつながる。そのため例えば学問なら、環境問題の学際的研究などと分野間の協力という方法もあるが、それと共に場合により、それをうまく位置づける分類法そのものの再検討も必要になろう。

また記事・論文などのアーティクルには、キィワードを付けて利用希望者の便宜を計る。資料の山の中から目指す物を引き出すための、手がかりの糸を付けておくわけである。ただし、それが内容によくマッチして、本当にそれを代表しているのではないワード、単なる分類分野を示すだけの空虚な語なら、キィになるどころか、いたずらに人を惑わし、手間暇をかけるだけのものにもなるうる。これも自己矛盾である。独創といっても、それにはしっかりした普遍性の基礎が必要である。

情報やデータとしての図書資料が蓄積されてますます大量になり、しかし電子機器を駆使して整理し処理されて、高速で利用可能になってきた現在、普遍性の基礎もまたそれに対応していよいよ重要である。適切に鋭くフィットする

検索を可能にするには、どんな分類が必要なのか、有効なキィワードとはいかなるものか。それぞれの分野で検討することが求められる。これは単なる図書の分類という問題に留まる事柄ではない。さらに基本において、専門分野間のバウンダリを越えるもっと深い知の普遍性、知的活動の共通性の問題である。国際交流とか国際協力とかいった社会的活動も、共感や共通の関心に基づいて起こされる連鎖反応である。そこに知的世界の大きな共通の潮流の中にあるとの自覚の必要もまた、指摘できるであろう。



鍼灸大学の図書館に就いて思う　その1

学長　米　澤　　猛

大学にとって図書館は極めて重要且不可欠の施設である。現在の情報社会に於いて図書館に期待される事は益々増加し、将来への要望は量り知れない大きな物である。

図書館は単に書籍を収集すると言う事だけでは無く、設立に際して背景となった専門領域の歴史的、地域的、更に文化史的資料を収集整理し、要望に応じてこれら資料を提供する責任を負わされている。従って総ての大学や施設は大なり小なり独自の歴史的背景を有しており、上記の責任を負うものである。

我が国の図書館は近年急速に発展してきた。とは言え、欧米のそれに較べると、稍々遅れていると言わざるをえない。これは図書館と言う社会資産に対する人々の考え方や取り組み方に違いが有るからであろう。日本でのこの種施設の原型は宗教施設に属していた。所謂古典と言われる資料の多くは各地の寺院或いはそれに準ずる施設に保管されることが多く、而も組織化されたものではなく、好事家により小規模の文庫として残されてきた。而もその数は少ない。

欧米殊にヨーロッパでは、日本と同様に宗教的施設の一部により対応が為されていた。これには都市や国家の誕生の歴史、都市国家と宗教との関わり方から考えねばならない。

そして図書館の位置付けと言う事が問題となる。これらは図書館史第1期と見なし得る。

即ち都市国家として誕生成立して来たヨーロッパの小都市では、王族一家を中心とした街作りが為され、王族を守る市民と、同時に市民は生命・財産の保障を受ける訳であるが、それらの人や子弟の教育の場、と宗教活動の中心となる教会、これらを囲む城壁から成りたっている。この形は中世から続くドイツ地方都市に現在でも典型的な形で残されている。例をドイツ中央部の都市マールブルグ市に求める事が出来る。

この都市は、その中央部に小高い丘があり、そこにはかって王侯一族が居住した古い城がある。丘の中腹で城の近くに古い教会があり、それらを囲んで住宅街が有り、王侯に仕えた市民及び商人達の居住区となり、更にその外側は城壁で囲まれている。その外側にはラーン川が有り、その対岸には現在大学があり医学部の他2・3学部がある。この城壁に囲まれた市内に古い資料を保存する図書館が有り、新しい文献や資料は対岸に作られた図書館に保存されている。この10年間に更に大学の増築が行われ、対岸に理学部や工学部が建設されている。新しい施設

は総て新市街に置かれ、旧市街は手を付けること無く保存されている。そこにはその地域の文化が都市の発展の歴史と共に色濃く残されている。

大都市の図書館は前記の中小都市が発展した時に取り得る配置を大都市構造の中に示している。例えば、ウィーン市にあるアドモント僧院はその一つとして挙げられる。

即ち、この僧院に在る図書館は1074年大司教ゲブハルトによりザルツブルグから運ばれた伝導書及び礼拝書を基礎として成り立ったものである。以後数次の戦禍等により一部蔵書は離散や収集を繰り返し、現在150,000冊の印刷本と1,500部の手書き原稿及び900の初期印刷本を蔵している。書庫の隣に閲覧室が在り、数人の人が借りだした本を読んでいた。

また、ウィーン市郊外ダニューヴ河畔のメルクに在るベナデイクテイン僧院に所属する図書館も同様に宗教的背景の強い支援により維持されてきた。此所の施設は1089年レオポルドⅡ世、1111年レオポルドⅢ世により設立された。繰り返えす火災等により屡々破壊されたが、その都度修復されて今日に至っている。僧院全体が黄色に統一された美しい建物である。80,000の蔵書を持っている。

是等は初期の宗教的援護の下に収集されたキリスト教関連の書籍である。文化史的に大きな意義を有するものである。閲覧希望は申込みにより受理される。

大学の図書館、特にこれらの施設の近くに在るウィーン大学の図書館は、1365年大学の設立と同時に設立された。この図書館は16世紀迄順調に発展したが、その後衰退し蔵書は離散していった。残った蔵書は王室図書館に移された。1777年、新しい図書館が建設され、散逸していた書籍、マリア・テレーサからの寄贈等により再出発することに成り、1815年にかけて破壊した僧院から大量の書籍を受け入れ、1884年現在の建物に移動した。その後両世界大戦による被害を受けたが、建物も1964年より追加されて、180万の蔵書と1226の手書き文書を有している。

この大学本部の図書館と関係の深い施設に国立図書館（Austrian National Library）が在る。これは14世紀に創立したもので、以後1920年迄王室の図書館として知られ、その間ハプスブルグ家のフレデリックⅢ世、マキシミリアンⅠ世、フェルディナンドⅠ世の庇護の下に維持された。1626年、手狭になった為宮廷に移され、1726年、現在の場所に移動した。この施設は、フランス革命の頃フランスからの圧迫のもとに在り、その後強力な政治的支援により、またハンガリーの影響から離れ次第に充実したものに発展している。

この様に図書館に就いてドイツとオーストリアを中心にその発展の歴史を見てきたが、何れも宗教的な施設として発足したもので、当時の国王や権力者等の支持をえて、次第に拡大し、広く文化史的資産と言う形を取って寺院に安住の場所をえた訳である。この様な宗教的庇護は、洋の東西を問わず共通した点であり、我が国に於いても同一の経過を取っているが、仏教が主体と成っている点で異なっている。何れにせよ図書館は主として宗教的教議やdocument及び哲学書・歴史的書籍を蔵書の中心とした形を取るわけである。

宗教改革後、大学は次第に発展をとげ機械文明の時期に入る訳である。大学の発展は加速され、多くのFacultyの設立を伴い、図書館も新しい時代へと入って行くことになる。（未完）

平成5年3月15日

不老長寿

附属病院長　小　関　忠　尚

不老長寿は「いつまでも、年をとらないで長生きをすること。perpetual youth and longevity」であり、不老不死は「年もとらず、死にもしないこと。immortality」を意味する（日本語大辞典、講談社、1990)。細菌やアメーバ等、環境が許せばひたすら無性分裂を繰り返す単細胞生物は寿命のプログラムを持ち合わせていないので不老不死であるが、遺伝物質を混合するのに性的な生殖を行う人間など高等動物では、不老不死は人口過剰と、繁殖と進化の低下を意味することになるので、種族が環境に適応して生きのび、知能に恵まれる為には、生殖を終えた固体が衰えて死ぬ寿命のプログラムが必要となる。寿命のメカニズムについては、ヘイフリックの細胞内老化時計説や、遺伝子レベルでの数々の研究があるが、真相は判っていない。

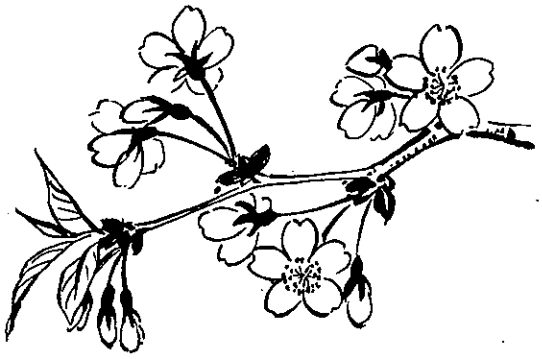
不老不死は望めないとして、不老長寿は昔からの人類の願望である。人間はどの位長生き出来るのであろうか。確かな世界一の長寿者として知られているのは旧ソ連邦のグルジャ共和国に住んでいたシラリ・オグリ・ムスリモフ老人である。1805年5月20日生まれで、1973年9月2日、前日まで元気だったのに忽然として急死し、年齢168 歳3ケ月であった。もし京都に住んでいたとすると、文化2年の生まれであるから、京洛の巷に尊皇攘夷の嵐が吹き荒れた慶応2年頃には既に還暦を迎えており、その後明治、大正、昭和と生きて、東京オリンピックや、大阪の万博も元気に見物にいって、昭和48年に亡くなった事になり、驚くべき長寿である。100歳の時、26歳の奥さんと結婚して、二人の間に娘さんが生まれ、ムスリモフさんの血を引くものの合計は220人という豪勢さである。長生きをして、何時までも肉体の衰えが見られなかった例に、よく挙げられるのはイギリスのトーマス・パーである。スコッチウイスキーのオールドパーのボトルには、ルーペンス描くの肖像画と共に、Thomas Parr. Aged 152 years .was interred at Westminster Abbey A.D. 1635と印刷されている。この人は102歳のとき、強姦罪を犯して18年間刑務所入りした後、120 歳で二番目の夫人カサリン・ミルトンと結婚して子供ができ、152歳の時に珍しい長寿としてチャールズ一世の宮廷に招かれたが、慣れない御馳走をつい食べすぎて腸を壊して亡くなり、血液循環の発見者として有名なウィリアム・ハーベイが解剖した結果、病変がなく、肋軟骨さえ化骨していないで若者のような弾力があったそうである。

このような超長寿者は別として、100歳以上の長寿者が集団的に沢山住んでいる世界の長寿郷と言われる所は、エクアドルのアンデス山系のビルカバンバ、チベットのフンザ、とグルジャ共和国のアブハジャなどある。長寿の共通因子を捜すため、これらの地域を訪れたハーバード大学のリーフ博士は、これらの地域は皆標高1000メートルを越える山岳地帯で、起伏のある環境と希薄な空気が、日常の暮らしをするだけでも身体の運動量を途方もなく増やすことと、生活を通じて1日1200〜1900カロリーの低カロリー食を取り、その内容はビタミンの多い野菜や果物、蛋白源としてチーズ、牛乳、ヨーグルト等が多い点が共通点として挙げられ、彼らが遺伝的に長寿の資質に恵まれている事も否定できないが、良い環境因子の中で生活している事が大きな原因であると述べている。

人の寿命時計は遺伝的にセットされているらしいが、寿命を左右する大きな因子は環境因子で、国々や地域の寿命統計に強い影響を与えている事が、多くの老年病学者に認められている。現時点の科学で遺伝子を操作して寿命を伸ばす事が出来ない以上、環境因子の中の調整出来る因子はコントロールし、分別のある生活様式を創り上げていくことが寿命を伸ばす手段であり、このアプローチは、適当な栄養、適当な精神力の活用、調和の取れた運動や休養などで、老化を招く心身の病気の発現を遅らせる努力を意味している。

三大成人病である虚血性疾患、脳血管障害、がんの予防が不老長寿に大切な事は言うまでもない。虚血性心疾患、脳血管障害の原因となる動脈硬化の危険因子には、遺伝や性、年齢など修飾不可能な因子もあるが、ある程度修飾可能な因子として、高血圧、肥満、糖尿病、ストレスやA型性格（血型ではない）、喫煙、コーヒーなどが挙げられていて、予防医学では、その対策が中心になっている。がん予防の12カ条は昭和53年に高松宮妃癌研究基金財団の10周年記念講演会が催された時、当時の国立がんセンター研究所長の杉村隆博士が、伊藤整氏の女性に関する12章にならって発表されたもので、偏食しないでバランスのとれた栄養をとる・同じ食品を繰り返して食べない・食べ過ぎ、脂肪のとり過ぎを避ける・深酒はしない・喫煙は少なくする・適量のビタミンA．C．Eと繊維質のものを多くとる・塩辛いものを多量に食べない、あまり熱いものはとらない・ひどく焦げた部分は食べない・カビの生えたものは食べない・過度に日光に当たらない・過労を避ける・体を清潔に保つの12ケ条である。友人からは30年も発癌の研究をして、こんな結論が出たのかと軽蔑の眼を向けられたと書いておられるが、日常のライフスタイルの改善の中に、成人病を予防して、不老長寿に繋がる鍵が潜んでいる事は確かである。

不朽の名作を残して短命であった天才もあり、不老長寿だけが人生の目的ではないと言われれば、それは医学の範疇ではないが、平凡な人間には、せめて、他人に迷惑を掛けない健やかな老年を送りたいのが念願である。



入院の功罪

内科　下尾和敏

一昨年の秋、肺炎のため一ケ月の休業を余儀なくされた。主治医の診断はマイコプラズマ肺炎であった。

一週間ほど風邪症状が持続していたが、休む勇気もなく解熱剤を使いながら、そのうち治るだろうと仕事を続けていた。入院となった日は自分の外来診療担当日であり、どちらが患者か分からない状態ながらも一応外来を終了させた。まだ30歳代だからそう簡単に肺炎などにはならないだろうと、高を括っていたが、余りに熱感が強く震えが来るほどとなり、念のためとレントゲン写真を撮ってみた。なんと右上肺野に淡い影が出ていた。自分でも見た瞬間に「あ、こりゃ結核をやっちゃったか。」と思った。（回りも同じ考えだと見えてその日の内に府立医大の結核病棟に個室予約が入っていた。）肺結核なら半年は仕事ができないなと考えながら、とりあえず明治で入院することになった。

自らが患者となることに若干の恥じらいを感じながら入院生活が始まった。常々は口うるさい患者には困ったものだと医療従事者の立場で考えていた。しかし、いざ自分が患者になると、点滴はこちらから、採血はこちらと注文を付け、準夜の人手の無い時に解熱剤を、水枕の氷をと、看護婦さんにはさぞ煩わしい患者であっただろうと思う。看護婦の皆さんはいずれも良くしてくれた。（もっとも自分の病院の医者が相手では粗末にも扱えなかっただろうが、少なくとも

自分が疎まれている存在ではなさそうであった。）明治の看護婦さんは親切であるという患者さんたちの評判を身をもって感じることができたのは不幸中の幸いと言ってよいのだろう。

入院中は当然暇を持て余した。熱に魘されながら、ぼーと天井を見つめて色々と悪い方へ考えを巡らせていた。やはり結核なのか、いや高熱だから結核ではなさそうだ、細菌性肺炎か、そうだ煙草をたくさん吸っていたから肺癌になったのか、うん肺癌の閉寒性肺炎も考えられる、等々。一人で落ち込んでいた。私の愚妻などはもっと最悪である。入院時には結核のようだと主治医に言われ、夫からは肺癌も覚悟しておいてくれと言われた。入院している本人以上に落ち込んだようだ。悪いことをしたものである。

入院四日目にしてようやく解熱した。結核の疑いも薄れてきて、結核病棟の予約もキャンセルできた。肺癌でもなさそうだったから、十三日目にして退院となった。主治医はもう少し入院をしていて欲しかった様であったが、わがままを通してしまった。自分は医者であり愚妻は看護婦なのだから、後は自宅でも回復できるとの理由をつけた。それならば最初から入院しなければ良いようなものである。勝手なものである。

勝手をしたから罰が当たった。熱は下がったが、咳がかえって酷くなったのである。余りに強烈な咳で肋骨を痛めてしまった程で、結局退院後二週間も仕事に復帰できなかった。まあ入院を続けていても結果は同じであったとは思うが、医者の忠告はやはり聴くものなのであることを学んだ。しかし一方で、この咳には実は少し感謝もしている。咳が酷く、煙草を吸えなかった。入院と合わせて一ケ月煙草から離れざるを得なかったのである。

当時、私と紫煙の付き合いは学生時代に始まり、16年間一日40本のヘビースモカーであった。煙草を吸っていないと考え事ができず、イライラしてしまう。立派なニコチン中毒であった。高血圧や虚血性心疾患の患者さんに「煙草は命を縮めますよ。」と諭す言葉も語尾が消え入りそうになる。自分が止められない物を人に止めろと言う矛盾を常に胸の奥に押し込めていた。循環器学会場では循環器のドクターが煙草を吸うべきではないという非難を浴びつつ止められない。自分は循環器の医師としては不適格なのかなと自問していた。嫌煙主義の先生方の言葉や子供の非難が身に突き刺さったが、でも止められなかった。刻一刻と虚血性心疾患の好発年齢、癌年齢に近づく自分が情けなく、卑下していた。

その煙草から好むと好まざるに関わらず一ケ月離れざるを得なかった。また肺癌と肺結核のシュミレーションのような入院は実際堪えた。職場に復帰した当初、一本煙草を吸ってみたことがある。が、まだ体調が回復していなかったこともあり、ひどく不味くクラクラした。煙草の煙が心底、体に滲みた。これでやっと煙草が止められたのであった。以降、禁煙歴は一年を越えた。体調は以前より遥かに良くなった。よく胃腸を壊していたのに下痢一つしなくなった。ご飯を一膳しか食べられなかったのが倍は食べられるようになった。風邪もひきにくくなった。何よりも嫌煙主義者の目を気にしなくてもよくなり、患者に堂々と禁煙を勧められるようになった。

良いことだらけかと思ったが、人間なかなか精進できないものである。みるみる太りだした。中性脂肪が上昇し、脂肪肝となった。皮下脂肪のみならず内蔵周囲の脂肪もついた。ズボンのサイズがどんどん拡大してしまった。禁煙して確かに肺癌のリスクは減少しただろうが、虚血心へのリスクは喫煙の一つが減って肥満と高脂血症の二つを背負ってしまったのであった。

入院の功罪相半ばというところだろうか。

映像を見て思うこと

解剖学　熊　本　賢　三

年末年始の休暇中に録画しておいたビデオをゆっくりと見ることができた。様々なジャンルのものを見たが、野生観察などは、わずかな時間に要領よく必要なことを濃縮して見る者をなるほどと納得させてくれた。鷹の巣作りの観察では産卵、育児そして巣立ちに到るまでの鷹の細やかな表情を周りの自然の変化とともに映しだし、あたかも我々がそこにいるかのような錯覚を起こさせてくれる。厳しい自然の中で長い時間をかけて撮影し、そのフィルムを編集してまとめ上げて一つの作品にするまでに費やす苦労は並み大抵のものではないだろうが、見る方はそんなことには関係なく、暖かい炬燵に入ってくつろいでみることができる。

解剖学や病理学などの形態分野においても映像、特に写真は必要欠くべからざるもので、人を納得させる一枚の写真を得るためにかなりの時間と労力をかけている。満足いく写真を撮すためには、標本、固定、包理、薄切、染色などさまざまなことを検討した後、自分の主張が十分に表現出来る撮影部分を選ぶことになる。ほんの数枚の写真を仕上げるだけでも随分と苦労することがあるが、一冊の本を作るとなると相当な忍耐と努力を要するであろう。書物に掲載されている写真は映画とは異なり、何時でも側において繰り返し見ることができる。それらの写真を“見る”のではなく“読む”ように、眺めていくと新しいこと、知ってはいたが十分に消化されていなかったこと、そしてよく知っていることなど、いろいろなことが盛り込まれていることがわかる。写真は活字と同じように、時には活字以上にわれわれに多くのことを教えてくれる。写真が語るものを謙虚に受け止めるためには、読む方に十分な知識を必要とする。ことに形態学では美的感覚も無論必要だが、的確な写真が撮れるとともに、写真の意味することを正確に読みとることが求められる。正に写真は形態学にとって活字そのものである。如何に美麗な、心のこもった字が書けるかは日々の努力しだいである。私にとって写真は常に楽しいもの、人に自分の考えを伝える大事な手段である。時々てこずらされることもあるが、思わず笑みがこぼれるようなそして多くの人がうなずいてくれるような、そんな写真が一枚でも多く焼ければと思っている。

西洋図書館小史（その十二）

附属図書館　八　木　克　彦

（承前）

以上のほか、このフランクフルト都市・大学図書館にはハインリッヒ・ホフマンのStruwwelpeterのオリジナル稿本、ライヘナウ修道院から齎された象牙の表紙と14世紀初めの彫刻のある金鍍金銅板の裏表紙で装釘された読誦集、9,800の写本、5,000の楽譜、2,500インキュナブラが所蔵されており、また1603年以降のフランクフルト出版物の貯蔵所であると同時にドイツ言語学関係文献の収集でも有名です。

このような都市・大学図書館はハンブルク、ケルン、チュービンゲン等にもあって、ケルン大学図書館の社会科学関係の文献、チュービンゲンのインド学や中国学のように、それぞれの図書館が特色のある蔵書を有し、現在では相互貸借の制度を活用して利用者の便をはかるとともに、各々が専門領域の資料を分担収集し、独自の管理組織や情報処理システムをもってサービスしております。

次にドイツに隣接するオーストリアですが、この国は今でこそ東西550km、南北300kmの小国に過ぎませんが、嘗てはオーストリア＝ハンガリー帝国としてヨーロッパを代表する国家であり、最盛期にはその領土は西は大西洋岸から東はバルカンに及んでおり、オーストリアの領主ハプスブルク家は15世紀以降ドイツ（神聖ローマ帝国）皇帝の称号を帯びてヨーロッパに君臨しておりました。

そのハプスブルク家にゆかりの深い図書館としてオーストリア国立図書館（österreichische National bibliothek）をあげることができます。

創設は14世紀まで溯り、ハプスブルクの皇帝フレデリックⅢ世（1449〜93）、マキシミリアンⅠ世（1493〜1519）、フェルディナントⅠ世（1531〜64）の庇護の下、宮廷図書館として知られ、当初はMinorite修道院にありましたが、狭くなった為1626年に王宮の一角に移りました。

その後1726年には有名なバロック様式のホールを持つ現在の建物に移転しています。

18世紀には大学図書館から多数の書物が移管され、また1783年には、ヨーゼフⅡ世によって解散させられた修道院（約700）の蔵書の中からおもだったものを引き取りました。

革命戦争の折1809年にはウィーンが仏軍に占領されたのですが、貴重書は前もって疎開してあったので戦火を免れることができました。19世紀の終わり頃コレクションの成長が鈍化しましたが、その後フォン・ハーテルやフォン・ツァィスベルク等の活発な政策で活気を取り戻しました。

1918年オーストリア・ハンガリー帝国の解体後この図書館はオーストリア共和国の所有となり、1945年以降「オートリア国立図書館」と呼ばれております。

第二次大戦後、収容場所の問題が大きく浮かびあがり、王宮に“新宮殿”と呼ばれている大きな翼棟を建て増し、その大部分を国立図書館が譲り受けて1962年から仕事をはじめ1966年に正式にオープンしました。

この図書館は300万冊に上る図書をはじめ多数の写本、インキュナブラを収蔵するとともに、オーストリアで印刷された資料、オーストリアに関して書かれた資料の集中的収集、オーストリア書誌の刊行、目録カードの配布、相互貸借、出版物の交換等についての中心となっております。

ウィーン大学図書館（Universitätsbibliothek Wien）

起源は大学創設の1365年迄溯ることができますが、数世紀にわたる沈滞ののち、1775年新しい図書館が建てられ、活動を禁止されたジェスイット教団のコレクションとマリア・テレジア（女帝、1740〜80）から贈られた個人的蔵書が基本的な財産となりました。その後1815年迄に、解散させられた修道院の書籍を大量に引き取り、1884年には現在の建物に移っています。

図書館は二度の大戦で大きな被害を受け、完全な復旧は1951年迄かかりました。

この館はオーストリア学に関する特別なコレクションを作っており、また650冊余のインキュ

ナブラを所蔵しております。

このほか、ウィーンには議会図書館をはじめ各官庁の図書館が幾つもあり、それぞれが20〜50万冊の蔵書を有しています。

なお、ウィーン自治体の公共図書館は中央館と五十数館の分館、移動図書館をもって一般教養図書館網を形成しております。

続いてスイスの図書館ですが、この国は永年の中立政策のおかげで大戦の被害を免れ、多くの図書館が無傷のまま残っています。

代表的なものはベルヌのスイス州立図書館（蔵書数150 万冊以上）とチューリッヒ、ジュネーブおよびバーゼルの大学図書館です。

特に蔵書の多いバーゼル大学図書館（Öffentliche Bibliothek der Universität Basel）は1460年以来の歴史をもち、宗教改革の後、押収された修道院のコレクションを幾つか収容したり、博物館図書館を合併するなどして所蔵を殖やし、1896年にはバロック様式の専用の建物に移っております。この建物は1962〜68年に増築され現在約210 万冊の図書と32,000にのぼる地図を所蔵しております。

ベネルクス三国

ベルギーではアルベールⅠ世王立図書館が図書300万冊、写本3,500点をもって国の中央館として機能しており、ルーヴェンのカトリック大学図書館も二度の大戦で壊滅的な打撃を受けたものの、現在では新館を建てて150万冊を越える図書と多数のマイクロフォームを所蔵するに至っております。

ルクセンブルクの国立図書館は50数万冊を所蔵し、ルクセンブルク書誌、その他の文献目録を刊行しています。

17世紀以来日本と関係の深かったオランダには、家康が発行した通商許可の朱印状がハーグの国立古文書館に保存されています。

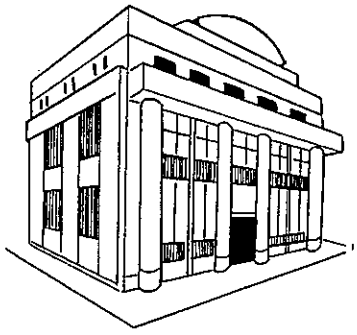
オランダの大きな図書館としては、国立図書館のほかアムステルダムとライデン大学の図書館がそれぞれ200万冊以上を有し、またユトレヒト大学図書館も150万冊を持っています。

以上、ヨーロッパの主だった国の図書館を見てまいりましたが、東欧、スカンジナビア等ヨーロッパにはこのほか幾つもの国があり、そこでは大小を問わず数多くの図書館が活動しております。

歴史の古い図書館、非常に貴重なコレクションを持っている図書館等興味深い図書館がまだまだ沢山ありますが、紙数にも限りがありますのでこの小史はこの辺りで筆を擱くことといたします。（おわり）

＜参考文献＞

岡田　温編：世界の図書館，日本図書館協会，1976年
田辺　広，荒岡興太郎：世界の大学図書館めぐり，雄松堂出版，昭和61年
フォルシュティウス・J，ヨースト・S著，藤野幸雄訳：図書館史要説，日外アソシエーツ，1980年
小野泰博：図書および図書館史，雄山閣出版，昭和53年
佐藤政孝：図書館発達史，みずうみ書房，昭和61年
片桐　薫：図書館の第三の時代，リブロポート，1986年
今来陸郎編：中欧史（新版），山川出版社，昭和49年
ブルクハルト著，柴田治三郎訳：イタリア・ルネサンスの文化（世界の名著45），中央公論社，昭和55年
ラフ・D著，松本　彰等訳：ドイツ近現代史，シュプリンガー・フェアラーク東京，1990年
マソン／サルヴァン著，小林　宏訳：図書館，白水社，1969年
Hollister, C. W. : Medieval Europe, Lohn Wiley & Sons, 1968年
Steele, C. : Major Libraries of the World, Bower, 1976年



近着東洋医学系図書一覧（和書）　（平成４年１月～12月収蔵分）

臨床鍼灸古典全書　27～33
篠原孝市監　オリエント出版　平３
針灸臨床の理論と実際　上.下
天津中医学院編　森和監訳　図書刊行会　昭63
現代語訳黄帝内経素問　上　南京中医学院編
石田秀実監訳　東洋学術出版社　平３
実用　中国養生全科　１～４、別冊
張有寓主編　除海訳　地湧社　平３
醫聖堂叢書　呉秀三編輯　思文閣　昭45
中医内科
韓冰等編著　服部碩知訳　金剛出版　平３
本草図譜総合解説　１～４
北村四郎他　同朋舎　昭61～平３
醫道日用綱目　本郷正豊原著　谷口書店　平３
漢方薬の薬能と薬理　谿忠人　南山堂　平３
和刻　漢籍医書集成　31～34
小曽戸洋、真柳誠編　エンタプライズ　平３
脈　経　第２冊、第３冊
王叔和原著　谷口書店　平３
臨床鍼灸学サブノート
明治鍼灸大学東洋医学教室編　明治鍼灸大学　平３
漢方腹診講座　藤原健　緑書房　平３
東洋はり医学会北大阪支部十周年記念論文集
編集委員会編　東洋はり医学会　平３
ツボで治す肩こり・腰痛
内田輝和　山陽新聞社　平３
東洋医学善本叢書　22～28　オリエント出版　平４
傷寒雑病弁症　訓読校注
長谷川弥人　訓注　谷口書店　平４
馬氏　気功点穴療法
廖赤虹　馬秀原著　エンタプライズ　平４
鍼道発秘講義　横田観風　医道の日本社　平２
カラーアトラス経穴断面解剖図解　上肢編
厳振国主編　川俣順一監訳　医歯薬出版　平４
小品方・黄帝内経明堂　古鈔本残巻
北里研究所 編　北里研究所　平４
全鍼師会10周年記念誌
関野光雄編　全日本鍼灸マッサージ師会　平４
脈　経　１～４
王叔和原著　小曽戸丈夫校注　谷口書店　平３

針灸学　基礎編
天津中医学院・後藤学園編　東洋学術出版社　平４
物理療法・鍼灸マニュアル
玉川鉄雄、西條一止編　南山堂　平３
中国漢方医学体系　張明澄　東明社　昭63
漢方研究のあゆみ　８　産婦人科
竹内正七　坂元正一　診断と治療社　平３
中国のランセット　－針灸の歴史と理論－
魯桂珍　J.ニーダム　創元社　平１
耳針法治療の実際　ハンドブック
P.ノジェ著　吉川正行訳　エンタプライズ　平１
刺鍼技術史　松本弘巳　谷口書店　平３
臨床からみたツボの検討
松本弘巳　沢井勝三　谷口書店　平３
鍼灸治療の證　馬場白光　谷口書店　平３
ハリと産科診療
蠣崎要　木村制哉　医学書院　昭50
中医臨床のための中薬学
神戸中医学研究会編著　医歯薬出版　平４
中医臨床のための方剤学
神戸中医学研究会編著　医歯薬出版　平４
中医臨床のための病機と治法
陳潮祖著　神戸中医学研究会訳編
医歯薬出版　平４
中医弁証施治必携
王元武　赤堀幸男　医歯薬出版　平３
中医臨証備要
秦伯末　李岩他　医歯薬出版　平１
漢方用語大辞典
創医会学術部　主編　燎原書店　平３
校勘和訓　黄帝素問　上.下
丸山昌朗　丸山太郎　昭51
鍼治療学の基礎と臨床　Ⅱ
宮沢康明　メディサイエンス社　平３
中国針灸学　Q＆A
靳瑞編著　川井正久　他編訳　医道の日本社　平４
刺針テクニック
韓景献著　佐藤弘監　谷口書店　平４
校勘和訓　黄帝鍼経　霊枢１～６
丸山昌朗　黄帝素問刊行会　昭40～41

あとがき

この一年間、図書館では電算化のため可成り忙しい日を送りました。特に夏休み中のバーコードラベルの貼付作業は冊数が多いだけに大変で、事務所の殆ど全員の方に応援してもらいなんとか貼り終えることができました。

新学期からは図書の検索も端末機の操作で簡単に行えるようになる予定です。乞うご期待。

なお、ご多忙中、本号にご寄稿いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。　（K.Y.）